

平成19年度「東北大学学校ボランティア」活動報告

—— 大学生による社会体験活動の教育効果の検討と自主運営の課題 ——

箕輪 寛記

東北大学学校ボランティア事務局代表
東北大学教育学部

本報告は、2003年度に発足し今年度で5年目の活動を終えた「東北大学学校ボランティア」(以下、学校ボランティア)の平成19年度の取り組みを報告するとともに、大学生が自主的に社会体験活動をすることの教育効果と、本学の特徴である有志学生が運営事務局(正式名称は「東北大学学校ボランティア事務局」。以下、事務局)を組織し学校ボランティア事業を運営していくことの今後の課題とを検討することを目的とする。

今年度は、事務局が再出発を誓った年であった。昨年度末に、本年報¹と本学出版会の基礎ゼミ実践事例集²に寄稿する機会を得たことで、これまでの活動の歩みを総括し、新たに中長期的な構想を掲げるなど、組織の維持・改善に関して今後の課題を見出すことができた。今年度は、その実践の1年目として始まった。

今年度のボランティア事業を省みると、各学校での活動自体は、昨年度同様長期にわたる活動が多かった。前年度からの活動が継続して実施されたことに加え、新しく始まった活動に関しても、来年度へ継続、恒例化への手応えを得た。ボランティア組織としての安定感はさらに増してきている。その反面、運営の中心組織である事務局では、卒業や就職活動など、学生ならではの事情があることと、1年生2名を含む15名という大所帯であるがゆえの意思疎通・共有の難しさとが浮き彫りとなった。組織の維持・改善の重要性を改めて認識させられた年であった。

1. 「学校ボランティア」概要

この章に関しては、基本的に昨年度の報告³を踏襲するが、人員構成など、変化があった箇所は、今年度のものに修正し、考察を加えている。

学校ボランティアは、次の2点⁴を目的として発足した組織である。

¹ 八木美保子「「東北大学学校ボランティア」活動報告—大学生による社会体験活動の教育効果の検討—」東北大学大学院教育学研究科教育ネットワーク研究室『教育ネットワーク研究室年報 第7号』平成19年3月 p105

² 八木美保子・森田有一・佐藤真衣・箕輪寛記・石田賢示「「基礎ゼミ」から地域貢献へ—「東北大学学校ボランティア」のとりくみ—」(東北大学高等教育開発推進センター編『「学びの転換」を楽しむ—東北大学基礎ゼミ実践事例集—』平成19年3月 p181)

³ 前掲「「東北大学学校ボランティア」活動報告—大学生による社会体験活動の教育効果の検討—」以下同じ。

⁴ 水原克敏・渡利夏子「「大学生による学校参加プロジェクト」の実践報告」東北大学教育学研究科 教育ネットワーク研究室『教育ネットワーク研究室年報 第5号』平成17年3月 p103

- ① 大学生によって地域の教育活動がより豊かになること
- ② そこでの活動を通して学生が社会の一員として成長していくこと

地域の教育活動の活性化に関しては、宮城県および仙台市の各教育委員会と連携しながら継続的に活動するなかで「特に算数の学習意欲が高まった」などの意見が寄せられたり、各学校からの継続的な依頼が直接寄せられたりすることから、一定程度達成できていると考える。しかし、昨年度までと同様、現在のところそれを示す記録を残していないため、今後学校や保護者にアンケートを採るなどの対応が必要である。学生の教育効果に関しては、後に改めて考察することにした。

(1) 組織

平成20年2月現在、学校ボランティアには204名の学生が登録をしている。教育学研究科の水原克敏教授を顧問とし、同研究室内に設置されている事務局⁵が運営の中心を担っている。顧問は運営上の方針など重要事項についての指導助言を行い、日々の活動を実際に企画・運営しているのは事務局の学生たちである。

登録学生の学部構成を見てみたい(表1)。

表1 登録者データの構成

学部	人数	大学院	人数
文学部	25	文学研究科	3
教育学部	89	教育学研究科	8
法学部	10	工学研究科	7
経済学部	4	経済研究科	1
工学部	11	情報科学研究科	7
理学部	27	国際文化研究科	3
農学部	2	環境科学研究科	1
歯学部	1	教育情報教育学研究科	2
医学部	2		
薬学部	1		
計			204

平成18年度と比べると、登録学生は44名増、活動学生は2名減であった。学部生にお

⁵ 平成19年度の事務局は、佐藤真衣(教育学研究科博士課程前期2年)、杉原由佳(教育学研究科博士課程前期2年)、箕輪寛記(教育学部4年)、齋藤慶一(教育学部4年)、竹中千尋(教育学部4年)、村田浩輔(教育学部4年)、石田賢示(教育学部3年)、宮城淳史(教育学部3年)、小田部翔(工学部3年)、阿部友幸(教育学部2年)、小野寺雄太(教育学部2年)、花田佳菜子(教育学部2年)、増井拓哉(文学部2年)、川村真衣子(教育学部1年)、洞庭佳江(教育学部1年)の合計15名である。

いては、全学部に関して登録学生がいる。活動先が学校ということもあってか、教育学部生が過半数を占めており、その後理学部、文学部と続く。この背景には、教員免許取得志望者が多くいること、また学校ボランティアの広報活動が教職科目の受講生を主な対象に行われていることが考えられるが、参加のきっかけや動機をアンケート等で量的に把握してはならず、詳細は分からない。

大学院生について、その構成比は学部段階と異なる。教育学研究科の大学院生が多いことは当然であるが、工学研究科や情報科学研究科といった自然科学系の学生の割合が比較的多いことが特徴である。昨年まで事務局の中心メンバーであった学生が工学部・情報科学研究科の出身であったことや、基礎ゼミの創設経緯などが大きく影響しているものと思われる。学部生でも工学部の構成比率は 6%であり、ボランティア活動を通して文系・理系の学生交流が広まることは望ましいことである。

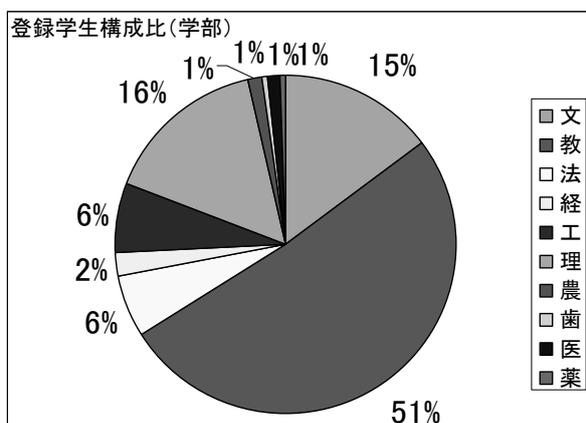


図 1 学部別登録学生構成比

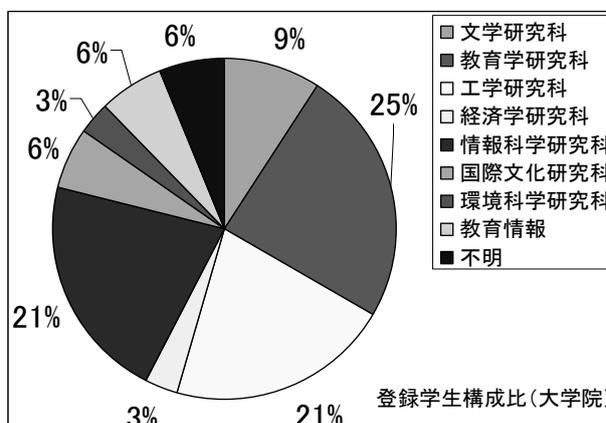


図 2 研究科別登録学生構成比

本組織は全学を対象とした活動であり、学部を越えて全学の学生が活動できることが特徴である。キャンパスの配置といった地理的条件から情報が伝わりにくいいためか、理系学部の学生が少ない傾向にあるので、各学部での広報活動などを行う必要があるだろう。

なお、204 名の登録学生のうち今年度実際に活動をしたのは 40 名弱である。一度活動を経験した学生は多くが継続的に他の活動にも関わっているが、登録しても活動には一度も参加していない学生も多く、いかにして多くの学生に活動を促すかが大きな課題となっている。最近の活動の多くは中長期に及ぶものが多く、活動率が高ければよいともいえないのが現状である。ただ、活動学生の多くがそれ以前に活動経験を持つことから⁶、現在の活動がこうした学生によって支えられているということになる。活動の様子をわかりやすく魅力的に伝えられるような方法を考える必要があるだろう。

⁶ 前掲「「基礎ゼミ」から地域貢献へー「東北大学学校ボランティア」の取り組みー」p182

(2) 活動までの流れ⁷

基本的な活動までの流れに、昨年度から大きな変化はない。小中学校については、仙台市教育委員会を通じて、高等学校からは直接、事務局が依頼を受けとり、学校との調整の後登録学生に周知し、参加希望があった場合、参加学生と学校と事務局の3者で打ち合わせをし、活動するという仕組みである。詳細は昨年度の報告書を参照されたい。

なお近年は、小中学校と他団体との間で、特定の学生が小中学校においてボランティア活動をする合意が得られた後に、事務局に依頼が来るケース（例えば、ある団体内で支援関係にあった学生と児童が、通常の学校生活でも支援関係を結ぼうとする場合）や、ある学生がある小中学校で活動している内に、派生的に他の学生を派遣するケース（例えば、ブラスバンドの指導をしている学生が、学校と親密になった結果、友人とバンドを組んで演奏会に参加）など、活動までの流れは一様でなくなってきている。

こうした活動で事務局が関わるのは、「ボランティア活動保険」を活動者にかける際の事務的なやり取りのみであるが、前者は東北大学生にとっての小中学校への窓口を担うだけの信頼を教育委員会から得ている証として、後者は活動学生や学校のニーズに応じていることの証として捉えている。

⁷ 学校ボランティアのホームページ (<http://www.sed.tohoku.ac.jp/volunteer/>) で、登録手続き、活動申し込み（パスワードが必要）、活動報告の閲覧、事務局の活動報告閲覧ができる。

(3) 学校ボランティアと事務局の1年間の主な活動内容

表2 学校ボランティアと事務局の1年

月	活動
4	入学式でビラ配り(5日) 仙台市教育委員会を招いての学生への説明会(17、26日) 教職科目の授業内で学生募集
5	東六番町小学校活動(23、26日)
6	貝森小学校活動★(13～15日) ボランティア支援機関情報交換会に参加(26日) 東六番町小学校活動開始(～9月) 金剛沢小学校活動開始(～9月) 長町小学校活動開始★(～11月) 人来田小学校活動開始★(～年度末) 通町小学校活動開始★(～年度末) 八幡小学校活動開始★(～年度末)
7	東二番町小学校活動開始(～年度末) 宮城県教育委員会主催「地域学習支援センター」事業開始★(～8月) オープンキャンパス用ポスターの作成と掲示★
8	「東北大学100周年記念まつり」におけるポスター展示 (教育学部・教育学研究科展示内)
9	上杉山中学校活動開始(～年度末) 財団法人「学生サポートセンター」に助成金申請
10	
11	学内掲示用ポスターを掲示
12	財団法人「学生サポートセンター」助成金採択
1	
2	長町小学校活動再開★(～年度末) 財団法人「学生サポートセンター」助成金贈呈式(5日) 教育ネットワークセンター年報に事業報告書(本報告書)を執筆★ 感謝状贈呈式★(予定) 学生向け年度末交流会★(予定)
3	仙台市教育委員会で年度末打ち合わせ★(予定)

「★」印のついている活動は、昨年度に引き続き行われた活動である。

2. 平成19年度ボランティア活動報告

本章では、今年度の活動を総括したい。「地域学習支援センター」事業や、八幡小学校の活動などは、毎年恒例になったといえる。昨年度、仙台市教育委員会での年度末打ち合わせをした際に担当の先生から、他大学と比べた際の東北大学の学校ボランティアの特徴は「継続性がある点」と「児童・生徒の学習への意欲を引き出す点」の二つだという、言

葉をいただいた。この特徴は、今年度も変わらない。

今年度から始まった活動は、前期に依頼が来たものが多い。後期は、依頼が来たものの、活動が実現しないことが比較的多かった印象が事務局としてはある。それは、前期の方が学生のモチベーションも高く、学生の生活スタイルが固定しきっていないためではないかと思われる。

以下は各活動の担当事務局メンバーが執筆した活動の概要である。

① 東六番丁小学校

【活動日】平成19年5月23日（1名）、5月26日（4名）

【活動者】4名

教育学部	4年	男	法学部	3年	男
理学部	2年	女	教育学部	2年	女

【活動場所】東六番丁小学校

【活動内容】

5月23日は、午前中、運動会のリハーサルの手伝い。主に1年生に付き、整列や移動や行進の際の補助。

5月26日は、1日を通し、運動会本番の手伝い。リハーサル時の活動に加え、運動会後の片付けも一緒に行なった。

【活動者の感想】

- 炎天下で26℃という環境でしたが、子どもたちの天使のような笑顔に癒されました。反省点を挙げると、おしゃべりしたり遊んだりなど、子どもに対してこちらも子どもとして接するぶんには問題ないのですが、子どもを整列させたり、ケンカを止めたりなど、大人として接するのはまだ経験が足りないようです。実際子どもと接してみて、自分が子どものころとそう変わらないように感じました。
- 子供達の間で喧嘩をしてしまい、泣き出すという場面が2度ありました。何度かボランティアに参加してきましたが、泣く子への対処は初めてのことでした。最初はどうしようと思いましたが、勝手に体が動き、両方ともうまく対応できました。運動会のお手伝いということで、初めて出くわした状況もたくさんありました。しかし、それをうまく対処することができ、いい勉強になったし、自分の自信にもなりました。

【担当者の反省・課題】

このような運動会の手伝いといった活動は今回が初めてであった。2日間（1日だけの参加も可能であった）だけの活動だったので、初めてボランティアに参加する方も参加しやすかったのではないかと。学生にとっては時間の確保がしやすいという利点もあっただろう。今後もこういった行事の依頼が増加していけば、ボランティアに参加してくれる学生も増えていくのではないかと。

（担当者：花田佳菜子）

② 貝森小学校

【活動日】平成 19 年 6 月 13 日～15 日

【活動者】2 名

文学部	学部 2 年	男	国際文化研究科	修士 1 年	男
-----	--------	---	---------	--------	---

【活動場所】泉ヶ岳

【活動内容】

5 年生児童の野外活動、主に児童の安全面の補助。

初日は泉ヶ岳登山。同じ 5 年生でも体力の違いから登山速度にバラつきが生じるため、各児童のペースに合わせての付き添い。2 日目は、飯ごう炊さん時の包丁の使い方指導や火の管理、オリエンテーリング時の付き添い。3 日目は、焼き板づくりにおける火の管理。

その他にも、児童の誘導や荷物運び、ビデオカメラの撮影。また、親元を離れて過ごす児童たちの不安を理解し、フォローする必要もあった。

なお、この活動では仙台放送の取材も行われ、後日、東北大学 100 周年記念を特集したニュースのコーナーで放送された。

【活動者の感想】

- 初日の山登りには晴天に恵まれ、子どもたちと楽しく活動することができた。3 日間を通して大きなケガや病気にかかった児童はおらず、彼らにとってこの野外活動がかけがえのない素敵な思い出となってくれていることを願っている。
- 夜は打ち合わせの時などに先生方といろいろな話をする事が出来、勉強になりました。先生や一緒に参加した方によくしていただき、問題なく過ごすことができました。

【事務局担当者の反省・課題】

事務局の担当者としてだけでなく、参加者としても活動に関わった。活動者としては 2 年目の参加となる。事務局の担当者が活動にも参加することで、小学校側と参加学生との連絡や打ち合わせがスムーズに行われた。実際の活動において、先生方から予想外の指示を受けるといったこともなかったため、十分に打ち合わせを行うことができたと思っている。反省点は、小学校から要望があった女子学生の参加が叶わなかったことである。(引率された小学校職員の方のうち、女性が 1 名しかおらず、女子児童のフォロー役が足りなかった。) 来年度は、活動の PR 方法の改善も含めて、この点を改めていきたい。

(担当：増井拓哉)

③ 東六番丁小学校

【活動日】平成 18 年 6 月～平成 19 年 9 月 毎週火曜日

【活動者】1 名

教育学部	2 年	男
------	-----	---

【活動場所】東六番丁小学校 さくら組

【活動内容】

朝8:30から給食の時間まで、学校の特別支援学級での授業補助・休み時間における子どもたちとの交流を行った。国語・算数や音楽の他に水泳の授業にも参加した。

【活動者の感想】

- 授業や休み時間や給食などあらゆる場面で子どもたちや先生方と交流したため、親密になることが出来、楽しく活動できました。夏休み中の学校の夏祭りに招いていただき太鼓の発表を見たり、学芸会に招いていただき子どもたちがたくさん練習した一生懸命な演技を見たりと、彼らの笑顔や元気に自分自身励まされました。

【担当者の反省・課題】

今回の活動は他のボランティア活動での交流から生まれたものであり、担当者である私自身だけの参加だったため、連絡が密に出来た。私たちの大学の学校ボランティアでは障害をもつ子どもを対象にしたボランティアに着手していないため、事前勉強会などを通してより多くの学生に特殊支援教育に触れてほしいと考える。

(担当：阿部友幸)

④ 金剛沢小学校

【活動日】参加者と学校側とのスケジュール調整により決定。

毎週木曜日、午後3時頃から1時間強の活動。

【活動者】2名

教育学部	3年	女	法学部	3年	女
------	----	---	-----	----	---

【活動場所】金剛沢小学校

【活動内容】

ブラスバンドクラブの指導補助。

放課後の吹奏楽部の活動補助。3～6年生が所属。基本的には6年生が中心となって後輩の指導をする。学生は補助的な役割を担う。

【活動者の感想】

- 返事や挨拶がしっかりできる元気な子どもたちが多く、みんな音楽大好きでノリノリで演奏しているので、一緒に練習していて楽しかったです。演奏会を見たときの楽しそうな演奏で元気付けられました。これからも金剛沢小学校吹奏楽団を陰ながら応援します。

【事務局担当者の反省・課題】

事務局への要望の中で、月間の活動予定や、予定変更について何かあったら教えてもらえると嬉しいというものがあった。事実、学校ボランティアの活動はいったん始まると活動者と学校との個別のやりとりになることが多く、事務局として学校に対して活動内容や予定の確認を行うことが少ない。個々の活動について事務局が逐次把握するのは有志学生にとって小さくはない負担であるが、活動の円滑化のためには徹底しなければならない。

来年度は、活動状況の確認においても気をつけていきたい。

(担当：石田賢示)

⑤ 長町小学校

【活動日】 毎週木曜日・金曜日（活動者の都合により調整） 各日 2 名

【活動者】 2 名

教育学部	学部 4 年	男	教育学部	学部 2 年	女
------	--------	---	------	--------	---

【活動場所】 長町小学校

【活動内容】

勉強に遅れがみられる子どものサポート

各種学校行事の運営サポート

【事務局担当者の感想と反省・課題】

この活動には、担当者である私自身も参加した。前年度に引き続き 2 年目の学校だったが、去年と比べて学生への対応が整っていたと思う。(学生用ロッカーや休憩室の提供等)

担当学年は 1 年生、5 学生の 2 学年だった。1 年生の担当者は、午前中の 4 時間、4 クラスを 1 時間ずつまわって、クラスの担任の先生と一緒に丸付けをしたり、授業についていけない子供に付き添ったりした。決まった科目の補助ではなく、算数、国語から音楽までさまざまな科目を見る事ができ、また 1 年生のどのクラスの子供たちとも関わることができ、とてもいい経験になった。

5 年生の担当者は、算数、社会（コンピューターを使用する際）、理科（実験）などの時間に、難聴の児童や学習が困難な児童について指導した。

授業外の活動でも、運動会の時期には、踊りの練習、運動会のリハーサルなどのお手伝いもした。また、演劇鑑賞会なども子供達と一緒に参加したり、仙台市内の自主研修や、学習発表会の演劇練習、お楽しみ会などの企画に参加したりした。

一日に渡ってボランティアすることも多々あり、学校の先生の仕事の幅の広さ、学級経営の難しさなど、学ぶべきものは多かった。

(担当：斎藤慶一)

⑥ 人来田小学校

【活動日】 算数授業補助：週 1 回(活動参加者により異なる)、午前中の授業 2～3 時間分
 ブラスバンド指導補助：参加者と学校側の相談により決定(月 2～3 回程度)

【活動者】 3 名

農学部	4 年	男	教育学部	3 年	男	教育学部	3 年	女
-----	-----	---	------	-----	---	------	-----	---

【活動場所】 人来田小学校

【活動内容】

(1) 算数授業補助(活動者：3 名)

活動の細部は、活動するクラスの担任と相談の上決定するため異なっている部分もあるが、

基本的には算数の授業に参加し、プリントや問題等の採点や、理解に苦戦している子のフォローなどを行う。

(2) ブラスバンド指導補助(活動者：教育学部3年女性1名)

ブラスバンド部の活動に参加し、トロンボーンなど楽器演奏の指導を、ブラスバンド部の顧問と一緒にを行う。また、3月にはブラスバンド部の定期演奏会に参加し、演奏を披露する予定もある。

【活動者の感想】

(1) 算数指導補助

- 朝早く家を出ないといけないという辛さよりも、また子どもたちと会えるという嬉しさの方が大きかったです。活動に参加できてよかったです。
- 何度も通ううちに子どもがどんなタイミングで手伝ってほしいと考えるのか、どんなヒントを出したら考えやすいのか、どんな言葉が嬉しいのかわかってきました。先生方は教員志望の私に実際の指導の練習をさせて下さることもありますし、すごく恵まれた環境です

(2) ブラスバンド指導補助

- 今年で3年目になります。はじめ3年生だった子たちも、もうすぐ6年生です。私の役割は、主に土曜日の練習のときにパート練習や個人練習で、リズムや音や吹き方がわからないところを教えてあげることです。土曜日の練習は、保護者の方が交代で差し入れを持ってきて、活動の様子を見ていかれます。子どもたちと私が仲良しなのはもちろん、保護者の方々と私もすっかり仲良しです。太白区民祭りや小学校バンドフェスティバルなど、学校外での活動で緊張しつつも生き生きしている子どもたちの姿を見ると、保護者の方々と一緒に保護者気分になります。毎年、1年の集大成で3月にブラスバンド部定期演奏会があります。いい形で1年間が締めくくれるようにお手伝いしていきたいと思います。

【事務局担当者の反省・課題】

3年目の担当になるが、今年度は初めて算数の授業補助の活動も行うこととなった。遠方の学校のため参加者が少ないことが懸念されたが、3名の学生が活動に参加し、学校側の希望を概ね満たすことができた。事務局担当者が活動に参加したこともあり、小学校側との打ち合わせなどはスムーズに行えたが、活動日が全員異なっていたために、活動者同士の交流や、活動状況の把握が上手くできなかった。活動者との連絡を密にし、状況の把握をすることは今後の課題として次年度へ生かしていきたい。

(担当：宮城淳史)

⑦ 通町小学校

【活動日】平成19年6月～7月・10月～20年3月

各曜日一人ずつ午前中に活動

【活動者】8名（下の表を参照）

教育学部	4年	男	教育学部	4年	女	理学部	3年	男
工学研究科	2年	男	文学部	4年	男	文学部	2年	男
法学部	3年	女	文学部	3年	女			

【活動場所】通町小学校

【活動内容】

授業補助が基本だが、その日何をするかは学生が各学年の先生方と随時話し合いながら決めていた。実際の活動は授業中にテストの採点をしたり、休み時間に子どもたちと一緒に遊んでふれあったりするなど様々であった。

【活動者の感想】

- 子供たちから年賀状をもらったり、プロフィールを書くように言われたりして、個人情報の扱い方に少し困ることもありました。また、生徒が良くない行動をした時、ボランティアとしてどこまで児童を叱るべきなのか迷うこともありました。
- クラスによってその雰囲気や子供たちの性格が全く違う事に驚きました。また、効果的な褒め方を教わったり、叱ることを要求されたりして、教育者の仕事の深さというものを感じました。来年度への希望として、もう少し時間の融通がきく方が、1、2回生が参加しやすくなるのではないかと思います。
- ずっと教育現場に興味を持っており、高校の教職課程は取っていたのですが、どうしても度々メディアに取り上げられる“今の小学校”を見てみたく思っていました。実際ボランティアに参加させていただいて感じたことを率直に申し上げると、「安心」の一言に尽きます。先生方は優しく時には厳しく子どもたちと向き合っていて、また子どもたちもそれぞれの個性をぶつけ合いながら毎日を過ごしていて、僕が通っていた頃の小学校より何か“悪い”と感じられる部分はなかったように思います。そして、自分の昔も思い出されて、「先生はこのようなことを考えながら行動していたのか…」と感じ入ってしまうことも多々ありました。
- 学芸会の合唱にギターで飛び入り参加させてもらうなど、積極的に学校行事に関わらせていただき、とても楽しく過ごさせてもらいました。

【担当者の反省・課題】

通町小学校は学生が通いやすい場所にあるため、学校側の要望通り、各学年に学生ボランティアを一人ずつ配置することができた。他の学校が募集に苦労していることを考えれば、恵まれた環境・条件にあったと言えるだろう。また、学校の先生方も快く協力してくださり、こちらの都合に合わせていただくことが多かった。さらに学生ボランティアの方々も、中には活動は午前中が基本であるにもかかわらず生徒の下校時まで活動したり、担当曜日でなくても学芸会や文化祭などの学校行事に参加したりするなど、ボランティアへの意識が高かった。

学校ボランティア事務局及び学生ボランティアとして活動してきて、重要なことは先生方と事務局、

そして学生ボランティアの3者が互いに連携し合い、子どもたちについて共に考えることであると感じているが、今年度の通町小学校では多少なりともそのような関係性・信頼性を構築することができたかと思う。これを基盤として今後も継続的に発展へとつなげていくことが課題である。

(担当:村田浩輔)

⑧ 八幡小学校

【活動日】平成18年7月～平成19年2月

【活動者】10名

教育学研究科	2年	女	教育学部	2年	男	理学部	3年	男
教育学部	4年	男	教育学部	2年	男	教育学部	3年	女
教育学部	4年	男	教育学部	2年	女			
教育学部	4年	男	教育学部	2年	女			

【活動場所】 八幡小学校

【活動内容】

月2回程度、水曜日の放課後に14:50から15:30までの40分間、算数の学習指導補助を行った。希望した4年生・5年生の児童がそれぞれ学校で用意された算数のプリントを演習し、学生は学年、習熟度別にそれぞれ分かれて担任の先生方と共にその答え合わせと解説を行う。プリントは単なる計算問題に留まらず文章題なども豊富であった。小数の計算や図形など小学生が最初につまずきやすい内容を中心としたプリントであった。

【活動者の感想】

- 人と接する活動は難しいけれど、たくさんの楽しみもあると感じました。大切なことは、「自分が当たり前、自分が基準」だと思い込まないことだと知りました。歳も離れていて、育った環境もおそらく私の子ども時代とは違う児童のみなさんと触れる中で、大切なことを教わったと思います。
- この活動を通じて手と時間をかけてあげればつまずいてしまった子どもたちが目を見張るほどに計算が解けるようになるという成長力の高さに驚きました。またその一方では先生の数や勤務状況等が厳しい現実によって、子ども達が成長できる可能性が抑えられているかもしれないと考えました。

【担当者の反省・課題】

去年と同様参加学生も多く年間を通じた活動である一方、今年から対象が2学年になったことから、学生の負担を少しでも減らし、毎回一人一人が楽しみ、そしてまた参加したいと思えるように心がけた。昨年とは異なり水曜日が6限までの授業となってしまったために、大学の4限と重なってしまい、そこに授業が集中する大学1年生の参加がなかったのは残念であった。今後も、随時募集をかけるなどしてより多くの学生に参加してもらい、充実した活動を続けていきたい。

(担当:阿部友幸)

⑨ 宮城県教育委員会 「地域学習支援センター」事業

【活動日】平成 19 年 7 月 24 日～8 月 2 日の 7 日間（柴田高校★）

平成 19 年 7 月 30 日～8 月 10 日の 7 日間（石巻工業高校）

平成 19 年 7 月 31 日～8 月 9 日の 8 日間（佐沼高校）

平成 19 年 8 月 1 日～8 月 10 日の 8 日間（白石女子高校★）

平成 19 年 8 月 1 日～8 月 8 日の 6 日間（角田高校★）

平成 19 年 8 月 1 日～8 月 9 日の 7 日間（名取高校★）

平成 19 年 8 月 1 日～8 月 9 日の 7 日間（塩釜高校★）

平成 19 年 8 月 1 日～8 月 10 日の 8 日間（迫桜高校）

平成 19 年 8 月 2 日～8 月 17 日の 8 日間（古川黎明高校★）

平成 19 年 8 月 2 日～8 月 10 日の 7 日間（気仙沼高校★）

【活動場所】宮城県内の高等学校（東北大生が活動を行ったのは、上記★印の高等学校）

【活動内容】

仙台市以外の宮城県各地の高校を開放、古川黎明高校では午前中に小学生、午後に中学生が教室に入って勉強し、ボランティアの学生が個別に学習のアドバイスをした。午前、午後ともに 3、4 つの教室を使用し、1 つの教室におよそ 40 人前後の児童、生徒が入った。半日あたり 1,000 円の謝礼と、実費で交通費が支払われる。一日活動する場合には、午前 8 時 30 分から午後 16 時近くまで高校にいることになる。活動に際しては、元教職の方からなる学習相談員と宮城教育大学や仙台大学等の県内外の大学の学生と協力して支援にあたる。

【参加者】15 名

教育学研究科	2年	女	教育学部	4年	男	理学部	2年	男
教育学研究科	2年	女	農学部	4年	男	文学部	1年	女
工学研究科	1年	男	理学部	4年	男	文学部	1年	女
文学部	4年	男	教育学部	3年	男	教育学部	1年	女
教育学部	4年	男	教育学部	2年	女	教育学部	1年	女

【活動者の感想】

- 初めは集中できない子どもに対して戸惑いましたが、一つ問題ができるごとに声を掛けて、時には誉めたりなどしていくうちに、学習意欲が湧いた様で集中できるようになった子どもたちがたくさんいて嬉しかったのを覚えています。
- 児童・生徒が集中して取り組んでいるときの目、ヒントを与えたときに「わかった！」と言うときの表情を見る度に嬉しさを覚えました。また、休憩時間にも、かぶと虫の絵を描いてくれたり、作った俳句を見せてくれたり、「先生！」と喋りかけてくれたりと、自習時間以外も、夏の暑さを忘れる幸せな時間でした。
- 持続力こそないものの小学生の集中力には毎度びっくりさせられます。分らな

かった算数の問題が解けて素直に喜んでいる光景を見ると、そういう気持ちを最近忘れていた自分に気付かされ、毎回よい刺激になります。中学生にもなると、比較的勉強に対して意欲的な人が来ているので黙々と勉強している人が多かったです。

【事務局担当者の反省・課題】

昨年、課題として東北大からの参加者が少なかったことを挙げ、教職課程の授業で周知を行うなど、今年度は参加が増えるよう工夫した。それによって、昨年よりも多くの学生が東北大から参加したことは成果だったといえる。しかし、今年度は実施高校が増えたことで、結果的には昨年同様人数の不足が課題となった。本事業は小中学生やその保護者から好評を得ており、規模が年々拡大していることから、来年度はさらに多くの学生に参加を呼びかける必要がある。

(担当：杉原由佳)

⑩ 上杉山中学校

【活動日】 毎週水曜日放課後の 15:30～(時々、14:30～や 15:00 など変更あり)約1時間

【活動者】

教育学部	4年	女	教育学部	4年	女
------	----	---	------	----	---

【活動場所】 上杉山中学校

【活動内容】

授業での学習に遅れがみられる生徒と、放課後に約1時間、生徒と一対一で、学習内容の復習や補習を行う。当日の活動内容は、その日に学校に行ってから、担当の先生と話を一緒に計画を立て、生徒とコミュニケーションをとりながら準備した課題などをこなしていく。学習よりもコミュニケーションをとることが中心で、遊び(ゲームやケーキ作りなど)も取り入れて活動した。

【活動者の感想】

- 週1回放課後に一緒に勉強をすることで、生徒は自分より少し年齢の高い大学生とたわいない話をするようになり、また徐々に参加した生徒どうしの距離が縮まっていった。

学習面以上に、人とかかわることや、自分を表現していく、ほかの人に自分の気持ちを伝えていくことの大切さに気付いてもらえたのではないかと感じた。生徒の変化は、すぐには目に見えて現れないが、生徒と楽しく活動をしていく中で少しずつ変化を見ることができた。そのような変化は、「生徒」と「ボランティアである私たち」と「先生方」という3者に、信頼関係が築けていてこそ生まれたものだと思う。

- 私が参加した当初は生徒2人ともおとなしい印象で、2人の間にも学習における対抗意識が強かった。しかし、回を重ねるごとに2人の中に少しずつ会話や笑顔も

見られるようになり、一緒に帰宅するようになったことは、大きな進歩として嬉しかった。先生の方からも、2人ともこの学習会を楽しみにしているという話を聞き、このような少人数を対象に一对一で学習や遊びをできる環境は、学習においても人間関係においても有意義であり、今後も続けてほしいと思う。

また活動を通じて、「褒めることの大切さ」を学んだ。学習プリントで満点はとれなくともできたところを褒めることやちょっとした遊びの中でも褒めるところを見つけることが、生徒の成長においてとても大切である。先生方は当然にそういった点を実践しており、その他の点においてもすごくいい刺激をもらったように思う。

【事務局担当者の反省・課題】

事務局メンバーが参加していない活動だったが、参加者の功績は大きく、中学校側からも多くの感謝の言葉を頂いくなど、良い活動になった。今後は、ちょっとした気づきでも担当者に相談してもらえるような関係作りを進めるとともに、私自身が参加者に定期的に連絡をとっていくことが必要であろう。

(担当：増井拓哉)

3. 事務局の活動

(1) 全体の活動

事務局は、学校ボランティアを運営するための中核となる組織である。その活動は一言で言えば、「学校ボランティアの活動全体の企画・運営」に尽きる。今年度の主要な活動内容を以下のように分類できるだろう。

- ①登録学生募集のための広報活動
- ②宮城県・仙台市の各教育委員会との連絡調整、意見交換
- ③各学校と学生との連絡調整
- ④学校ボランティアホームページの管理
- ⑤交通費支給を目指した、活動費用の獲得
- ⑥学校ボランティアの記録作成と活動報告
- ⑦他団体との交流・情報交換

また、活動の目的によって大まかに、学校ボランティアの維持のための活動と、改善のための活動とに分けることもできる。例えば、②、③、④は行わなければ事業そのものが滞ってしまうような維持のための活動であり、①、⑤、⑥、⑦は事業を改善していくための活動である。②、③、④に関しても活動を通して得た気づきを還元すべく、より良い方法を模索していくことは、もちろん改善の活動である。

今年度は、学校から来る様々な依頼にできるだけ多く応えられるように、また団体として成長できるように、特に①と⑤に力を入れた。⑤については後述する。まずは、①につ

いてである。学生は、空いている時間も興味ある活動の内容も様々であろう。登録学生数が増えれば、より多くの依頼に応えられると考えた。前年度に引き続き今年度も事務局では、新規サポートスタッフ獲得を目指して広報活動に重点を置いた。具体的には、入学式でのPR、キャンパス内へのポスター掲示などに加え、年度始め、夏休み前には積極的に教養教育の授業内で学校ボランティアについて説明を行った。昨年度に続き教職科目に焦点を当てた結果、多くの新規参加学生を獲得することができた。

今年度の特徴として、従来のサポートスタッフ登録を勧める活動全般のPRに加え、夏休み前に、「地域学習支援センター」の活動に絞ったPR活動を行ったことを挙げたい。タイムリーなPRは分かりやすい上、ホームページを見る機会のない学生に対して、学校ボランティアの実績を紹介するいい機会となった。活動終了後も、サポートスタッフ登録を継続した学生も多く、一定の効果があったと思われる。活動の幅を広げるため、理系学生獲得を目指したPR活動を昨年度から企画していたが、実現できたのはポスター掲示の理系キャンパス進出に留まった。

また⑦について、今年度は学外の団体との交流を図って、ボランティア支援機関情報交換会にも参加した。参加者は、ボランティアの分野が様々な上、学生が中心の活動は珍しく、すぐに共同で何か企画するまでには至らなかったが、学校ボランティアの存在感を示すとともに、お互い激励しあった。今後は、後述の助成金の贈呈式で知り合った他大学のボランティア団体と交流していきたいと考えているが、詳述は今後の課題に譲る。

今年度は今まで事務局の中心となっていたメンバーの卒業などに伴い、不安を抱えてのスタートとなったが、新メンバーの加入や、様々な試行錯誤を行った結果、現メンバー一人ひとりの個性を生かした活動を行うことができた。しかし、昨年度からの課題でもあった明確な役割分担システムの構築や、メンバー全員による現在の活動状況の把握などは今年度もできていなかったもので、来年度こそは改善し、より充実した活動を目指していきたい。

(2) 交通費支給に向けた取り組み—助成金申請—

今年度事務局は、活動資金獲得のため助成事業に応募した。その結果、採択され助成金10万円をいただいた。これは、初めての試みであった。

【応募の目的】

そもそもなぜ応募したのか。それは、学生の活動費用の獲得のためである。学生の活動費用の獲得は、昨年度の報告書中の今後の課題⁸でも掲げたとおり、重要な課題であった。

⁸ 学生の活動費用に関する課題は、前掲「「東北大学学校ボランティア」活動報告—大学生による社会体験活動の教育効果の検討—」p121で、以下のように述べられている。「4点目は学生の活動費用である。特に交通費の確保は早急に解決しなければならない。これは活動の充足率にも関わる重要事項である。現在仙台市教育委員会で市議会に要望を提出しているが、教育費の削減に伴い実現は難しいようである。そこで今後は、教育委員会と連携してアンケート調査や活動のPRを行うなどの働きかけをするほか、企業からの資金援助を得る計画も動き出している。」

学校ボランティアの活動が周知され、広まっていくとともに、継続的な活動や遠方の学校での活動での、学生の交通費の自己負担が問題になってきている。ちなみに平成 18 年度の交通費の学生の自己負担分は、計算上（キャンパスから小中学校への交通費×活動人数、回数の値から、活動先の小中学校から補助が出た分を引いたもの）48,990 円である。事務局では、原則として交通費は自己負担であることが、遠方の学校への活動が進まない原因の一つであると考え、学生の活動費用の負担を軽減する方法を模索していたのであった。

なお今回の応募では、助成金を活動学生の交通費として使用すること、2 年度に渡って使用することを明記し、採択を得ている。今後は、この交通費の配分の仕方、活動実態の把握の仕方といった運用の詳細を詰め、活動の促進につなげていきたい。

【申請先について】

今回の助成金の申請先は、「平成 19 年度学生サポートセンター『学生ボランティア助成事業』」である。この取り組みは今年度で第 5 回目を迎えている。募集の目的は、学生サポートセンターによれば、「他者への『おもいやり』は社会生活の根本であり、学生のボランティア活動を社会参加の第一歩と位置付け、自由な発想と行動力によって、社会貢献を計画・実行している学生の団体を対象に、組織の活性化やネットワーク作りなどを経済的に支援し、併せてリーダーシップの育成効果をも期待」⁹する、とのことである。また選考基準を「過去 2 年以上の実績がある学生を構成員とするボランティア団体であれば、『福祉』『環境』『地域関係』、『途上国支援』等活動領域を問いません」¹⁰、としている。このように、募集の目的は「東北大学学校ボランティア」の目的、活動内容と相反せず、十分資格があると考え、応募した。

【贈呈式への出席と人脈の広がり】

去る 2 月 5 日（火）に東京の学生サポートセンターで行われた贈呈式に、事務局を代表して箕輪と杉原が参加した。

その後の懇親会では、様々な大学のボランティアに関わる学生や職員の方との出会いがあった。ここから、他団体との交流につなげていくこともできそうである。これは、思わぬ収穫であった。

【まとめ】

今年度は、活動費用の確保について大きく前進した年となった。しかしながらこの結果は、これまでに金銭面の理由でできなかったことができるようになるという以上に、「東北大学学校ボランティア」のこれまでの取り組みが、社会に評価されたという点で喜ばしいことである。

⁹ 財団法人学生サポートセンターHP (<http://www.gakusei-sc.or.jp/>)

¹⁰ 同上

4. 大学生の教育効果の検討

以上の報告および実際に学校ボランティアで活動してきたことを踏まえて、大学生が教育現場において主体的に社会活動を行うことの教育効果を検討する。

昨年度の年報でも挙げたが、①異年齢集団との関わりによる効果、②社会との交流によるマナーの定着、③予期せぬ事態への臨機応変な対応（柔軟性）が身につくこと、④教育実習としての効果、などが期待できる。（詳細は昨年度の年報を参照されたい。）

ここで、もう一度「(2) 活動概要」の【活動者の感想】に目を通してほしい。初めは戸惑いながらも、児童・生徒や教員や保護者と関わりながら、学校という大学とは異なる「場」に順応していき、時には自らの判断で行動せざるを得ない場面をも乗り越え、自信をつけていく活動者の姿が、生き活きと伝わってくる。

感想には直接書かれなかったが、①に付随して、活動する学生間の関わりによる効果を付け加えたい。学生が、学部を越え、学部1年から修士2年、時にはそれ以上にもなる学年差を越えて関わる場は珍しく、大学生の人間関係の調整能力にも効果があると考えられる。

さらに今年度は、学校ボランティアに参加し、社会へと巣立っていく学生の視点から、活動の教育効果に迫ってみたい。2人の学生が振り返る、学校ボランティアの教育効果を以下に紹介する。

- 私は一昨年度から参加しており、今年度で3回目の活動でした。いつも真剣に問題を解く子ども達の姿に刺激を受け、毎週楽しく活動に参加できました。また私事で恐縮ですが、この活動を通じて生涯をかけて教育行政に携わりたいとの思いを固め、卒業後は行政官として文部科学省に勤務することとなりました。

思い返せば3年前の活動で、小学4年生にして九九があやふやの子、繰り下がりの引き算が苦手な子を見かけ少なからずの衝撃を受け、またそれ以上に、手と時間をかけてあげればそのような子どもたちも目を見張るほどに計算が解けるようになるという成長力の高さに驚きました。「授業についていくのが精一杯の子ども達が、算数を不得意に嫌いにならないようにするためにはどうすればいいのか」という問題の一つの答えが、この学校ボランティアの活動にあるように感じました。先生の数や勤務状況等が厳しい現実によって、子ども達が成長できる可能性が抑えられているとしたら・・・地域の力を学校に集めるべきだと思ったのです。

しかしながら日本では、八幡小のようなみんなが幸せになれる活動をしている学校はまだ少ないのが現状です。私は子ども達一人ひとりがその能力に応じた公教育を受けられるように、さらにいえば教育を「受ける」権利というよりも、「身に付ける」権利を行政の立場から実現したいと思いました。

学校ボランティアの活動は、社会の問題とでも言うべきものがあるからこそ、ここに必要とされて行くわけだと思います。問題を自分に引き付け、何かを学び取り、社会やみんながもっと幸せになれるように考えるきっかけを大切にしてほしいと

後進の皆さんに期待します！

【教育学部 4 年 男性】

- 私にとって学校ボランティア活動は、教員になろうと決意するきっかけとなるものでした。

私が学校ボランティアを始めたのは大学 1 年生の時で、始めは単に子どもが好きで、子どもたちとふれあいたい・子どもたちと一緒に楽しく学びたいという気持ちで活動に参加しました。しかし徐々に、楽しみたいという気持ちだけでは足りないと感じるようになりました。それは、子どもたちが少しずつ成長していく姿をより身近で見守っていきたいと思うようになったからです。

確かにどの活動でも、最初は私も子どもたちも互いに手探り状態で、うまくいかないと感じることが多々あります。しかし自分が心から真摯に子どもたちと向き合い、子どもたちを信じて活動をしていると、ふとした時に、生徒は素のままの自分を自然と見せてくれているのだと気付くのです。もちろん、子どもたちの成長の変化は、すぐには目に見えて現れてきません。しかし、子どもたちとかわることを諦めずに活動を続けていくと、思いがけないところで彼らの変化に気付くことがあります。そしてそれは、平素からの信頼関係があるからこそ生まれてくるものだと思います。

4 年間の学校ボランティア活動で、私は、子どもたちとしっかりと向き合うことの大切さと、なかなかうまくいかない難しさを実感しました。しかしそれらの活動は、私に「自分が今までどんな人生を歩んできたのか、そしてこれからどんなふうに生きていきたいのか」を考えさせるきっかけを与えてくれました。そして、私はこれからも子どもたちとより身近でかわっていきたいと思い、教員になる決意をしました。

ボランティア活動を続けてきたことは、私にとって大学生活の集大成であり、これからの人生の出発点でもあると思います。これから教員となっても、今までの経験を生かし、真摯に子どもたちと接していくことを忘れないでいきたいと思っています。

【教育学部 4 年 女性】

教育委員会の先生方や、学生の成長をも視野に入れ活動を企画して下さるような気概ある学校の先生方は、学校ボランティアの活動に、「学生に学校教育の現場を知ってもらおう」という効果も期待しているようだ。教育の現状を目にする機会というものは、教育学部の学生でもそう多いものではない。ましてや、他学部の学生であればなおさらである。しかし、学校ボランティアの活動に参加することで、その機会は格段に増える。実習生とボランティアの大学生という立場の違いにより、通常の教育実習とは視点も異なるだろう。

また、教育現場は言うまでもなく社会の一断面である。職員室には組織がある。子どもの問題、教育の問題は、社会の問題が巡り巡って子どもに降りかかった問題である。子ど

もの個性はその子の家庭が置かれた状況や家族の個性とつながっている。学校ボランティアの活動を通じ学生が、大学の中に留まらず時に社会に触れ合いながら、その都度、考えを巡らせ活動に工夫を重ねつつ、社会への見識を深めていくことができているのであれば、これにまさる教育効果はないだろう。学生への教育効果を検討するにあたっては、つい検証しやすい効果や、教育業界に限った狭い効果に目が行きがちである。しかし、ボランティア活動を材料にして、行動と反省を繰り返していく行為それ自体が、大学生を大学生たらしめる重要な活動であると考ええる。

上の二人の学生のように、教育現場に触れたことが進路に直接影響する学生は稀かもしれない。また、学校教育の現場に触れた後にどのような感想や態度を持ちうるのかは、学生個人で異なるだろう。今回は教育分野に巣立っていく学生に焦点を当てたが、今後も教育効果を検討する一つの視点として、様々な学生のボランティア体験の振り返りを記録していきたいと考えている。

以上のように大学生にとっての教育効果を述べてきたが、児童・生徒にとっても通常の学校の授業とは違った教育効果が期待できること言うまでもない。少子化が進み、向こう三軒両隣という言葉も過去のことに聞こえる昨今、彼らにとって大学生と触れ合う機会は滅多にないだろう。児童・生徒にとって大学生は、年齢的に教員よりも自分達に近く、兄や姉のようでありながら本当の兄や姉よりも大人である。また、毎日顔を合わせざるを得ない教員や級友ほどには利害関係も強くない。これらの特徴がうまく作用し、児童・生徒の憧れや気軽さを引き出すことも少なくない。これによって生じる子どもたちの心の機微や会話の内容は教員に向けられるものとも、級友に向けられるものとも異なり、本心からのものであることが多く、これだけでも教育効果として検討するに値するものではないだろうか。

5. 今後の課題

(1) 学校ボランティア事業全体の課題

平成18年度の活動報告でも挙げられていた課題¹¹の内、4つの課題（①活動の充足率の上昇、②活動依頼の基準、③学生の活動費用、④中学校・高等学校での活動の定着度の向上）について検討していく。

今年度の活動の中で、②活動依頼の基準に関して、以前は、学生ボランティアを活用することでより充実した教育活動を志向する学校がほとんどである中で、完全に学生に任せきりになり学生が戸惑う場面もごく少数ながらみられるといった、学校間での学生ボランティア活用の意識の違いが問題となっていた。しかし、今年度の活動においてはこういった現状はみられず、活動現場の教員と事務局の担当者の電話やメールを通しての連絡のやりとり、そ

¹¹ 他に、ボランティアの単位認可など学生がより活動しやすい環境の整備、系統的な記録の蓄積、新たな可能性の模索が挙げられた。系統的な記録の蓄積、新たな可能性の模索については、「(2) 自主運営の課題」に譲る。

して、参加学生が各活動日の最後に教員とその日の感想や今後の課題などを話し合う時間を設けるなどして、学生にとってより活動のしやすい環境づくりができていたといえる。だが、他 3 点に関しては一部改善された面が見られるものの、今後更なる努力が必要である。

初めに③学生の活動費用に関して、学生ボランティア団体助成金が支給されることになったため、今後 2 年間はそれを交通費に当てることで改善に向かう目処が立った。しかし遠方の学校に行く際に生じる交通費の自己負担を学校ボランティアが全額負担することになれば、交通費をかけずに活動する学生との間に不均衡が発生するばかりか、すぐに助成金が尽きてしまうことになる。よって、来年度、交通費は原則自己負担とし、年度末報告書を提出した学生に限って、一定程度だけ助成するという方針をとることにした。

次に①活動の充足率について検討する。仙台市教育委員会によると¹²、今年度は学校側から 505 件（平成 20 年 1 月 31 日現在）の要請が来たのに対し、実際に学生を派遣できたものは 258 件であったという。仙台市教育委員会からの依頼を受けているのは東北大学を含め 9 大学あるが、そのうち本大学には今年度 18 件の要請があり、実際に学生を派遣することができたのは 10 件である。本学への依頼自体が少ない印象を受けるかもしれない。しかしながら、これは活動基準にも関わる問題であるが、依頼の多くが障害を持つ児童・生徒のサポートであり、専門的な知識が必要とされるため、本学では対応できないのが現状である。加えて、今年度から新たに仙台市教育委員会と提携した大学も何校もあり、そちらに依頼を回しながら、新しい大学の活動への志向性を内容面や地理面で判断している、という事情もあると思われる。

本学に来た依頼で活動できなかったものは大きく 2 つにわけられる。1 つめは、遠方のものである。2 つめは、依頼の確認をした際に活動の中心が障害を持つ児童・生徒のサポートであると分かり断ったものである。遠方の活動について、前述の通り来年度は交通費の負担は改善される目処は立ったものの、どうしても移動時間の分だけ時間の確保が難しくなり、依然として希望者が少なくなることが予想される。しかし、前述のように、学校側は深刻な人手不足にあるようで、教育委員会は、そういった学校の現状を広く学生に知ってもらうことも、学生にボランティアとして教育活動に参加してもらう目的であるとしている。その点を学校ボランティアとしても考慮する必要があるだろう。経験的に、1 回だけの体験参加や、運動会や野外活動などの行事のように単発で学生も日程調節しやすい依頼は活動が実現しやすい。そういった依頼をもっと呼びかけるように学校と協力することができれば、活動を始めやすくなるだろう。また、勉強会や事前講習会を開くことで今まで対応していなかった障害のある児童・生徒のサポートにも対応できるようにすることも挙げられる。さらに、登録学生が今までどうしても文系学部中心だったことを考えれば、理系学部にも授業での宣伝やポスター掲載等を通してもっと PR することで、登録学生の

¹² 本報告執筆にあたり、仙台市教育委員会に取材した。

数を増やすとともにより広範囲の活動依頼に応えられるようになることが見込めるだろう。

④中学校・高等学校での活動の定着度に関して、仙台市教育委員会によれば、中学校での活動は若干ではあるが定着しつつあるという。一方、高校については平成20年度以降の定着度上昇に向け、夜間の高校での授業補助といったような新たな対策を講じられているということであった。学生は、実際は最も多い授業の中に入っていき活動は想像しにくいのか、登録する際に学生が最初に思い浮かべる活動は、部活動の指導補助である場合が多い。中学校・高校での活動は学生のニーズもある分野であろう。なお、高校からの依頼は仙台市教育委員会を通さずに直接学校ボランティアに届けられることになっているため、高校に関してはこちら側から活動内容についてのアピール等を行うなどして働きかけていくことも必要なのかもしれない。

小学校での活動に比べ、中学校・高等学校での定着度はやはり、まだ低いといえる。中学校・高等学校では、教科担任制であり、教員それぞれが分担して部活動指導・生徒指導にあたり多忙であるため、学生ボランティアを受け入れるという新しい方法の導入に向けた学校全体での協力体制が取りにくいことが要因だと考えられる。やはり、こういった現状において、学生が授業の面で広く参加するのは難しいかもしれないが、学校行事・部活動の指導での参加は十分可能なことといえるのではないだろうか。個々の先生である程度対応できるような、範囲を限定した活動を企画し、こちら側から中学校・高等学校へ持ち込むことが、中学校・高等学校での活動定着度の向上に向けて効果的であろう。また、このように行事・部活動への参加といった活動が増えていけば、自分が経験してきた特技を生かせると参加してくれる学生も増えていくという更なる効果も期待できる。

今年度新たに、他団体との交流の推進を課題としたい。他団体との交流には、問題意識の共有、運営ノウハウの共有、自団体の特徴の再発見など、様々な利点があり¹³、事務局が他団体との交流を志向してきたのは、前述の通りである。昨年度までは、なかなかうまくいかなかったものの、今年度は贈呈式で学生のボランティア団体とつながりを持つことができた。贈呈式には、関東の団体はもちろん、地元仙台の団体も出席していたので、実現が一気に現実味を帯びた。今後は、学校ボランティアにとっての利点を相手に伝えた上で、両者にとって有益な形で交流を進めて行きたい。他団体と交流行事を通じて、事務局員の成長や、登録学生の意欲の高まりをも期待することができるであろう。贈呈式に出席し、直接他団体と交流の構想を語ってきた事務局メンバーが今年度卒業するため、引継ぎをしっかりと行い来年度につなぐ必要がある。

(2) 自主運営の課題

今年度、事務局メンバーはさらに増え、学生ならではの事情を抱えながら運営に携わっ

¹³ 他団体と交流することによる利点については、前掲「基礎ゼミ」から地域貢献へ―「東北大学学校ボランティア」のとりくみ―（『「学びの転換」を楽しむ―東北大学基礎ゼミ実践集』―第4章 pp.181-194）に詳しいので、そちらも参照されたい。

た者も多かったことで、全員の予定を合わせて活動状況を報告しあう機会を設けることが困難になった。こうした状況から、ボランティア活動自体が充実していく一方で事務局運営が問題視された。

週に 1 回定期的にミーティングは開くものの、全員が集まることはほぼなかった。そこで、毎回レジュメを作って配布し、それを各自ファイルに保存すること、欠席した者は後日自分で取りに行くこと、またノートへの記録や、パソコン上の掲示板にその日に報告のあったことを書き込むことで全員が情報を共有できるよう試みた。活動の反省や記録の作成・報告といった特に重要な議題は、メールで連絡を取り合い別個に日程を調整し、できるだけ多くのメンバーが参加できるよう工夫もした。

しかし、限られた参加者で話し合い、その結果を欠席者は紙面上で確認する、という運営の方法には、決定を先延ばししやすくなるだけでなく、情報の共有を徹底するのが難しい上に、細かい部分が伝達できないことも多々あった。紙面上だけでは伝わりにくいことを欠席者に担当させるわけにもいかず、比較的毎週参加できていたメンバーの運営の負担が大きくなってしまった。さらに毎回、参加メンバーが変わるため、前回挙がった懸案事項が、次回は担当者が欠席したという理由で触れられず、次第に忘れ去られる、ということが、少なからず見られた。その結果、活動の維持に関わる依頼への対応が後手にまわったり、連絡調整に漏れがあり後日他メンバーの指摘であわてて確認したりした。活動の改善では、膝をつき合わせて話し合っているからこそ出てきたアイデアも、全体で共有して詰めることができず、結局来年以降に先送りされることがあった。

学校ボランティア事業を学生自身が事務局を組織し運営していく際の課題を考えるために、「3. (1) 全体の活動」と同様に、事務局の取り組みを学校ボランティアの維持のための活動と、改善のための活動とにわけて考えたい。

組織として信用を得るためには、登録学生、教育委員会、学校との連絡調整をしっかりと行い、事業全体を滞らせないという水準は守らなければいけない。しかし学校ボランティアの維持だけが重要なのではなく、学生ならではの視点で活動を改善し、発展させていくことも同様に重要なことである。この目的の異なる二つの活動の区別とバランスをメンバーがより意識することを、事務局の課題として挙げる。

活動の維持は、「しなければいけないこと」であり、決まりごとの中の活動である。必要な活動である一方で、これだけでは、学生が自主的に運営することに利点はない。

活動の改善は、「できたらいいこと」であり、新しい活動である。そこには、大学職員よりも登録学生に近い、学生ならではの視点からの気付きがあるのはもちろんのこと、メンバー個人の問題意識やバックグラウンドが宿る。事務局が、多様な学部のメンバーを欲し、新入生に対して他のサークル活動との両立を薦めてきたのは、このためである。

維持と改善、この 2 つを混同すると、どちらも「したほうがいいこと」になってしまう。維持には詰めの甘さが生じ、改善には主体性が宿らない。

このようなことを踏まえ、今後学生が事務局を運営していく方針を、「活動の維持を固めた上で、改善への工夫を少しずつ重ねていく」と定めたい。そのためには何をすべきか、ミーティングの記録の蓄積や仕事の役割分担をどのようにすべきかなどをメンバー全員で考えていきたい。

ここまで、有志学生による自主運営の課題について述べてきたが、事業全体の課題とは対照的に、基本的で抽象的な課題である。昨年度の活動報告には、事務局として模索すべき新たな可能性として、学内でのピアサポートや企業でのインターンシップへの活動の展開が挙げられていた。このことは、冒頭で述べた学校ボランティアの発足時の目的（①地域の教育活動がより豊かになること②そこでの活動を通して学生が社会の一員として生活していくこと）と一致しているため、早くから構想されていたことではある。しかし、学生に実感がわきにくいこともあってか、今年度も取り組むことはできなかった。だが、まずは上述の課題を消化し、小中高の学校を対象とした従来の学校ボランティアを一層充実させることに力を入れるべきである。その中で、大学や企業などのあらたな領域での活動へと展開していく準備や気構えも自然と醸成されていくだろう。

このように、学校ボランティアには、さまざまな可能性があることがわかる。5年目を終え、組織として「成熟」してきた感のある現状も、これまで参加してきた学生がさまざまな可能性の中から選び取ってきた結果ととらえることができるだろう。そこで、今後の学校ボランティアと事務局の方向性を考えるにあたって、期待も込めて、活動の新たな価値と目的を創り上げていくことを提案する。

「しなければならないこと」「できたらいいこと」も、活動の何に価値を置き、何を目的とするかで変わってくる。これまでは設立時を参照することが多かったが、来年度からは、事務局の創設期のメンバーは一人もいなくなる。そこで、学生が主体的に運営している強みを活かして、もう一度自分たちが本当に主体的になれる価値と目的を考えてもいいのではないだろうか。

今年度は、昨年度末に掲げた目標に沿って活動してきた。その目標は、設立時まで遡ることで再発見したものだったが、今度は原点に立ち返るのではなく、新たに原点を作るのである。組織の「新生」と言えよう。その中心を担うのは、教育現場の思いも、学生の思いも、受け止め続けてきた事務局以外にはないだろう。

このことができれば、この学校ボランティアという組織が「新生」と「成熟」を繰り返し、いつまでも若々しくあれるのではないだろうか。学校ボランティアに希望と期待を込めて、今年度の報告の結びとする。¹⁴

¹⁴ 本報告は、事務局メンバーが分担して執筆を担当した。ボランティア活動報告では該当箇所の終わりに氏名を記した。「学校ボランティア紀要（1）組織」では石田賢示、「事務局の活動（1）全体の活動」では小野寺雄太、「大学生の教育効果の検討」では増井拓哉、「今後の課題」では阿部友幸と花田佳菜子が執筆したものを元に箕輪寛記がまとめた。その他は箕輪寛記が代表で執筆している。